

錦帯橋世界遺産国際意見交換会

—主な意見内容—



平成31年（2019年）3月27日

日時

13時30分～16時00分

場所

岩国国際観光ホテル4階 錦雲閣

主催

錦帯橋世界文化遺産登録推進協議会

出席者

- ◆ ナント大学名誉教授、イコモスパネル委員、世界遺産コンサルタント
ミシェル・コット 氏 (Michel Cotte) 【フランス】
- ◆ 錦帯橋世界文化遺産専門委員会委員長、熊本大学大学院特任教授
小林 一郎 氏
- ◆ 一般社団法人日本イコモス国内委員会委員長、
国土舘大学イラク古代文化研究所教授
岡田 保良 氏

写真 (視察・市長表敬訪問・錦帯橋世界遺産国際意見交換会)



➤ 評価基準

技術史からの観点で、錦帯橋にはユニーク（独特、特異）さと独創性の2つの要素があり、評価基準(i)に該当し、合格の方向にある。言い換えれば、6つの評価基準の中では、適合する可能性が高い。

評価基準(iv)について、提案書の中で適合する記述がなされている。今後は周辺の町や自然、城等との調和に関する評価も組み込むことを検討してはどうか。

様々な職種による知識や技術の継承、材料の保管といった「無形」の要素に関し、評価基準(iii)への適合として検討に値すると考える。

生産プロセス全体が科学技術の集合体といった評価を受けた富岡製糸場のように、錦帯橋についても技術や材料等の生産システムが積み重なって出来たものである。

材料や支えるための仕組みも含めて、地道で着実な技術が受け継がれてきた「トランスミッション」（伝達）が一つのキーワードになる。

もう一つのキーワードは「インタンジブル」（無形の価値）。備蓄林や型板、古図面や史料、また、それを保管している施設も錦帯橋を支えているという意味では価値であり、市民のサポートなども含まれる。特に橋梁として「イノベーション」（革新、刷新、工夫）を加えながら技術の継承を行ってきたということは錦帯橋独自のもの。

➤ オーセンシティティ（真実性）

錦帯橋のローアーチについて、世界の橋梁史の中でまとめていく必要がある。

架替えにともなう「イノベーション」をどう捉え、評価するかということは、非常に微妙で、イコモスやアドバイザー委員会でも注意深く検証される対象となる。

技術的な真実性を語る場合、どのような改変が、どのような理由によりなされたのかということを明確に説明しなければならず、さらに、それが改善に向けてのものであり、意図通りに効果が発揮されたということに言及する必要がある。

例えば、鞍木の追加は厳密にいうと原型とは異なるものとなるが、技術的傑作あるいは土木上の傑作という視点で見た場合、より良きものとするために、真実性の中に「イノベーション」という要素が加味されたという捉え方ができる。

材料の変化について、理由も含めてきちんと書き込む必要がある。

例えば元々地元で取れたマツ等を使用していたが、現在は調達が難しく、購入しているという状況。質的に変化している鉄等も同様である。



▶ 市民との関わり

管理の計画に対する住民の関与が重要なポイントになる。地域の関わりが遺産の価値に大きな影響を与える。

地域の人々が遺産に関して感心を持たない場合は、やがて遺産の価値自体が失われてしまう結果を招き、反対に大きな関心を持つ場合は、遺産の価値としてプラスに働く。

住民の関与は、遺産を維持、管理、保存していくうえでの保険となり、将来に渡って良好に管理される手立てということで良い印象を与える。

▶ 感想（全般）&アドバイス

提案書について非常に登録へ向けて有効に働く内容もあれば、まだまだ答えなければならない疑問点もある。

錦帯橋は、技術史から見ても1つのランドマーク（その地域を特徴づけるもの、史跡）であるが、外国人から見て憧れの象徴となる景観美の素晴らしさを持っている。

人類の歴史としての課題である比較的低い高さによる木造アーチといった技術的な卓越性（見事に具現化しているということ）が価値としてあげられる。

⇒ 世界的にも非常に特筆すべきものである。

市民が錦帯橋に大きな誇りを持って様々な活動をしていることについて、世界遺産登録後の道筋に繋がるものとして感心する。

無形遺産と有形遺産の双方の価値を持ち合わせているのは、海外から見て日本独自のものであり、特異性のあるものだと言え、技術（テクノロジー）の顕著な見本として錦帯橋が実証することは、国際社会においても重要な意味を持つ。

無形な部分としての架替えやイノベーション、知識の伝承に関し、国際社会に対して教育、啓蒙していくことが必要である。

世界遺産登録に向けて非常に長期間のプロセスを辿っていくことになるので、マラソン精神で楽観的にいくことがもっとも必要なことである。

